

【取扱い厳重注意】

平成23年11月16日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 松林 聡

平成23年11月8日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

東京電力株式会社 福島第一原子力発電所 第一運転管理部作業管理グループ
兼 第一運転管理部当直副長 大野 光幸

2 聴取日時

平成23年11月8日午前10時00分から同日午後12時08分まで
(休憩なし。)

3 聴取場所

福島県双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森8番
J-VILLAGE JFAアカデミー福島男子寮2階ミーティングルーム2

4 聴取者

参事官補佐 松本 朗
主 査 松林 聡

※ 複数人で聴取したときは、全員の氏名を記載する。

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし (理由：(「対象者の希望による。」など簡潔に記載))

第2 聴取内容

事故時の状況とその対応について
別紙のとおり

第3 特記事項

なし

以上

【取扱い厳重注意】

別紙

【業務】

- 平成23年3月11日の震災当時、私は、福島第一原子力発電所第一運転監理部作業管理グループに所属していた。

【地震発生から津波到達直後の頃】

- 平成23年3月11日の震災当時、私は、1/2号機サービス建屋（以下「S/B」という。）の2階にある中操外執務室にいた。強い揺れを感じてすぐに、2号機側の中央制御室に行き、原子炉隔離時冷却系（以下「RCIC」という。）の操作盤の辺りで、当直員のサポートを行った。このとき、RCICが作動していることを確認した記憶がある。
- しばらくして津波が到達し、RCICが原子炉水位高で自動停止したので、同日15時39分頃、私がRCICを手動起動した。その後、2号機事故時運転操作手順書（事象ベース）で負荷のリスト等を確認したが、この手順書に基づいて作業を行った記憶はない。

【2号機M/CおよびP/Cの状況確認】

- 平成23年3月11日夕方頃、 当直長（以下「 当直長」という。）から電源設備を確認するよう指示された。そこで、部下の と共に、資料1にピンクマーカで示したルートで、金属閉鎖配電盤（以下「M/C」という。）がある2号機タービン建屋（以下「T/B」という。）地下1階へ行ったところ、階段の途中まで水が来ており、M/Cが水に浸かっている状態を確認した。近くにあった棒で水深を測ると、約60 cm位の高さであった。なお、2号機T/B1階にあるパワーセンター（以下「P/C」という。）の周りには水たまりができていた程度であった。同日16時30分頃、1/2号中央制御室に戻り、P/Cは大丈夫だが、M/Cが水没していることを報告した。この時の服装は、普通の恰好で特に全面マスク等も付けておらず、警報付きポケット線量計（以下「APD」という。）も持って行かなかった。

このように2号機の電源盤を確認した際、2号機T/B1階及び地下1階で、蒸気が出たり、異常な音を聞いたといった特段の異常はなかった。

- その後、同日20時03分より前の時間に、2号機T/B地下1階において、M/Cが設置されている場所（O.P.+約1,900 mm）とヒータールーム（原子炉に給水する水を温めるヒーターがある場所。O.P.約+300 mm）との高低差約1,600 mmを利用し、M/Cからヒータールームにつながる水密扉を開けることにより、先述したM/C周辺にたまった水をヒータールームに逃がすことができるのではないかと思い、部下の と共に、資料

【取扱い厳重注意】

1に緑色マーカーで示したルートで、2号機 T/B 地下1階のヒータールームに向かった。しかしながら、ヒータールームも M/C 周辺と同じ位の高さまで水がたまっていたことから、M/C 側の水を逃がすことはできなかった。この時の服装も、普通の恰好で特に全面マスク等も付けず、APD も持参しなかった。

【2号機 R/B の計器確認】

○ その後、1/2号中央制御室の計器を見ることができなかったため、現場の計器であれば見ることができるかもしれないと思い、当直長の了解を得た上で、資料2に青色マーカーで示したルートにより、2号機の原子炉建屋（以下「R/B」という。）の2階に設置されている計器ラックへ部下の[]と行くことになった。なお、この時の服装も普通の恰好で全面マスクもしていなかったし、APD も持って行かなかった。

私は、[]と一緒に、2号機 R/B 2階の計器ラックの場所まで行ったところ、計器ラックを取り囲むようにフェンスが設置されており、そのフェンスの扉に鍵がかかっていたため、[]がフェンスを乗り越えて中から鍵を開けてくれた。そして、私と[]とで計器を確認した。また、この頃だったかどうかははっきりとした記憶はないが、2号機 R/B 内で、「ドーン、ドドドーン。」という地鳴りのような音を聞いたので、SR 弁が開いたときの音だなと思った記憶がある。そのほかに、R/B 内で蒸気を見たり、異常に気づいたということはない。

その後、1/2号中央制御室に戻り、先ほど述べた計器ラックで確認した炉圧や水位を報告したように思う。中央制御室ホワイトボードの3月11日の記載の中に、「20:03、炉圧7.0 MPa、水位-140 cm で DS（ダウンスケール）、D/W 圧力30 kPa」とある。これは、先ほど述べたように、私と[]が2号機 R/B の計器ラックで確認した数値を報告した内容がこのホワイトボードに書かれたものと思う。

○ おそらく、津波到来後に2号機 R/B へ行ったのは、私たちが初めてだったのではないかと思う。また、2号機 R/B に行く旨を[]当直長に伝えた時、[]当直長から RCIC の状況を確認するよう指示されたことはない。

【平成23年3月12日の状況】

○ 経緯については記憶にないが、平成23年3月12日未明のうち、朝に比較的近い暗い時間帯に、部下の[]と一緒に、資料3にオレンジマーカーで示したルートで2号機周辺を回り、図に「CSTK（T と K は混合文字として1字で書かれている。）」と書いた場所に設置されていた2号機の復水

【取扱い厳重注意】

貯蔵タンクを見に行った。

復水貯蔵タンクの水位が満水時何メートルか忘れたが、通常の水量は全体の70～80パーセントであった。このときタンクの水位を確認したところ、水位は約3メートル弱であった。この分量は、通常の半分くらいの量よりちよっと多いくらいの量に相当する分量であった。

私は、中央制御室に戻ると、復水貯蔵タンクの水位を■■■■当直長へ報告した。この時も普通の恰好で全面マスクも付けず、APDも持って行かなかった。

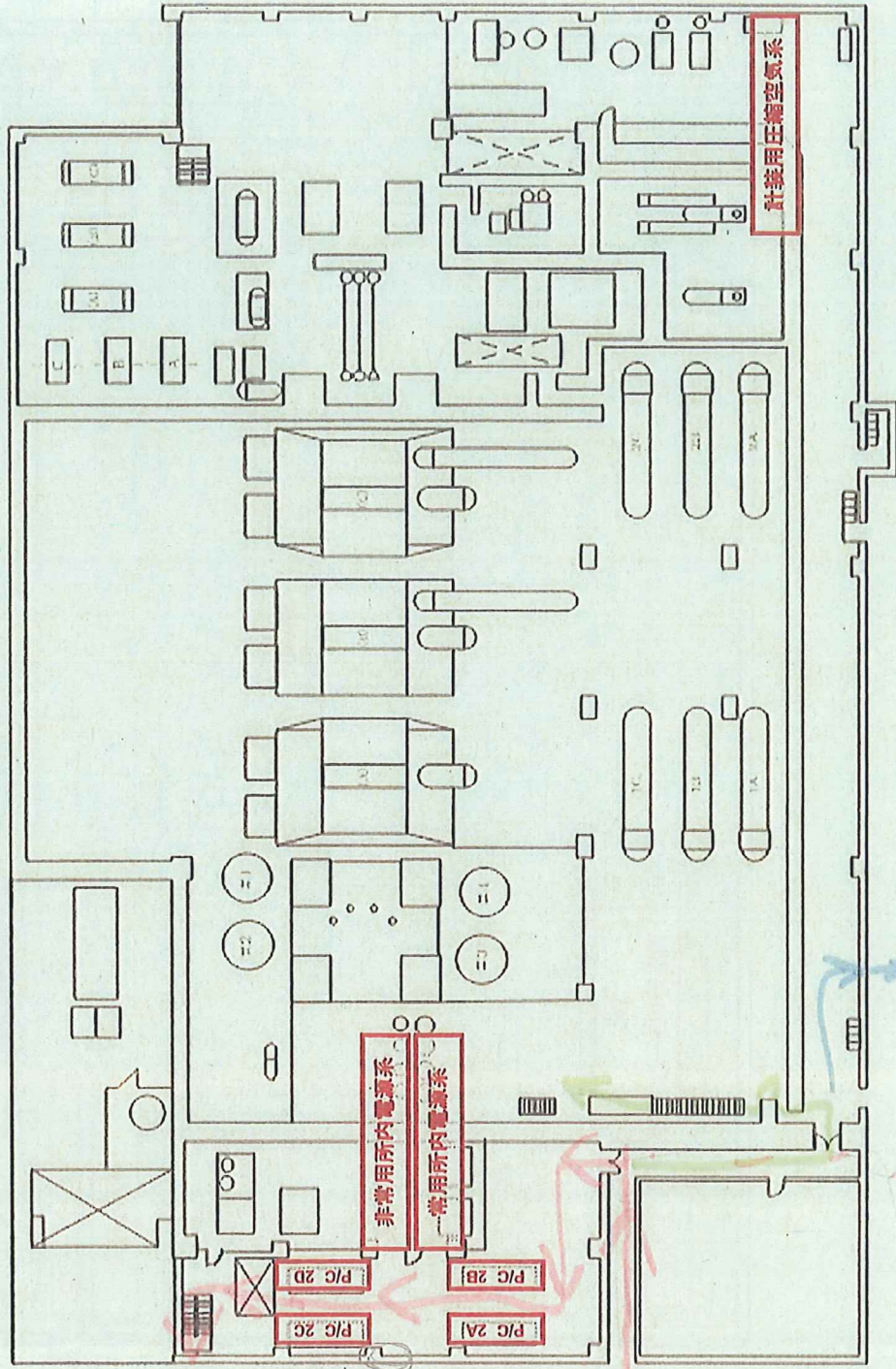
この報告をしたとき、■■■■当直長が、いずれ復水貯蔵タンクの水位は下がるから、2号機 RCIC の水源をサプレッションチェンバー（以下「S/C」という。）に切り替えた方がいいのではないかといった話をしていたような記憶がある。

聴取者より、復水貯蔵タンクに水がまだだいぶ残っているのだから、RCIC の水源を引き続き復水貯蔵タンクに求めることもできたのに、なぜこの時点で水源を S/C に切り替えるという話が出たのかと尋ねられたが、そのような話をしたのは■■■■当直長なので、■■■■当直長に尋ねてもらいたい。なお、自分の想像ではあるが、CRDを使って炉注水する際の水源として復水貯蔵タンクの水を使うので、そのために温存しておくという考えがあったのではないかと思う。

RCIC の水源を S/C に水源を切り替えた後、2号機 S/C の計器ラックを誰かが確認していたかどうかについて、自分は把握していない。

以上

2号機 T/B 1FL



50

Handwritten red annotations including a large bracketed area on the left, a large arrow pointing right, and a circled '50' on the right.